花明かりの宿場町

歴史ロマン傑作選

日本文芸家協会編

花明かりの宿場町 歴史ロマン傑作選
日本文芸家協会 編
© Nippon Bungeika Kyokai 1984

講談社文庫
定価440円

昭和59年1月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国オフセット株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-183156-9 (0)

講談社文庫

花明かりの宿場町

歴史ロマン傑作選

日本文芸家協会 編

講談社

〈編集委員〉
伊藤桂一
尾崎秀樹
武蔵野次郎

目次

同門の酒　池波正太郎　七
鵙（もず）　伊藤桂一　四九
蝮の恋　栗本薫　七一
鮎　澤田ふじ子　一〇三
鎖ざされた海　白石一郎　一二九
萩の雨　滝口康彦　一五四
空（くう）　綱淵謙錠　一九六
消えた時間から来た手紙　南條範夫　二二四
富士、異邦人登頂　新田次郎　二三六
うさぶろう　穂積驚　二六二
人形武蔵　光瀬龍　二七九
木骨秘聞　渡辺淳一　三一一
解説　武蔵野次郎　三五七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき

村上元三

読者の活字離れが言われはじめ、同時に小説の低調が、いろいろと伝えられる。はたしてそうだろうか。そんなことはない、と言っても、負け惜しみではない。

いまの月刊誌の目次にならんでいる小説の数は、少しも減っていないし、作家の数もどんどん増えている。現代小説、時代小説、推理小説のそれぞれの分野で、安定した活動を続けている人々は、以前より多くなった。ことに時代小説の畑では、不毛を伝えられていた伝奇小説を既成作家が手がけているし、新人も台頭してきている。

この選集の目次を見ただけでも、時代小説の分野がずいぶんひろがっている、とわかるし、この選集が売れているのは、それだけ読者が多い証拠であろう。

大正期に発生した大衆文芸は、戦前から戦後にかけて変貌をとげながら、作家たちの活躍は少しもおとっていない。

十年前は新人だった作家たちも、研鑽を積み重ねて、しっかりした骨格を持った作家に成長してきた。時代小説の畑だけで言っても、読者が離れて行っているとは考えられない。むしろ戦前戦後へかけての、華やかな時代小説の花盛りの盛況を再現している。

作家陣もにぎやかであり、読者の要望にこたえる一方、歴史小説の畑でも、書下しがさかんになってきた。短篇も、いまほど本格的な歴史小説が望まれている時代はなかった、と言っても言いすぎではない。

これからも、時代小説は、ますますさかんになるだろう。そう言っても、自画自賛ではない。この選集を読んでもらえれば、はっきりわかると思う。

昭和五十八年十月

花明かりの宿場町

歴史ロマン傑作選

大正十二年東京生まれ。小学校卒業後株式仲買店に奉公。長谷川伸に師事。昭和三十五年「錯乱」で直木賞受賞。「人斬り半次郎」「堀部安兵衛」「忍びの女」「男の秘図」等数多くの作品を発表。昭和五十二年「鬼平犯科帳」「剣客商売」「仕掛人・藤枝梅安」を中心とする作家活動により吉川英治文学賞を受賞。昭和四十九年より九年間にわたり「週刊朝日」に「真田太平記」を連載した。映画評論や食べ物の話でも活躍している。

同門の酒

池波正太郎

一

それぞれの都合によって日時が変ることはあるが、一応は、毎年の二月（現三月）十日の夕刻前にあつまり、酒食を共にして語り合うことになっている。

あつまる者は、秋山小兵衛のほかに三名。いずれも無外流の名手・辻平右衛門に教えを受けた老剣士たちだ。

彼らの恩師・辻平右衛門が麹町九丁目の道場を閉じ、愛弟子たちへ、

「いずれも、堅固でのう」

この一語を残し、弟子の内からえらんだ嶋岡礼蔵ただ一人を供に飄然と江戸を去った、その当日が二月十日であった。

師の恩を、その月日と共に、

「忘れぬよう」

というので、秋山小兵衛を合わせ、気心の知れた十名の高弟が、

「毎年の、この月、この日に寄り合おう」

と、約束をした。

このうちの六名が病死をしてしまい、一昨年からは四名になってしまった。

一は、秋山小兵衛。

一は、神谷新左衛門（六十八歳）といって、六百石の旗本だが、家督を長男にゆずり、気楽な隠居の身だ。

一は、内山文太といい、駿河・田中在の郷士の出で、七十五歳の長命をたもち、ひとりむすめが市ケ谷御門外の茶問屋〔井筒屋〕方へ嫁ぎ、後に老いた内山を引き取ったので、これも楽隠居の身である。

残る一人は、矢村孫次郎といい、四人の中では年下の四十三歳。孫次郎の亡父は信州・高遠の浪人だったというが、これこそ生涯を剣客として生きるつもりらしく、妻もなければ子もない。

今年は、この矢村孫次郎が欠席をした。

めずらしいことだ。いや、かつてないことだ。

（はて……不参ならば、そのよしを前もって、わしのところへ伝えに来るはずだが……）

と、小兵衛は不審におもった。

年に一度の同門の宴は、ここ数年、四谷・伝馬町の料理屋〔武蔵屋〕でおこなわれている。

武蔵屋は、御用聞き・弥七の女房が経営している料理屋で、さして大きな店がまえではないが、料理人の腕もたしかで、土地の評判もよい。

武蔵屋だと、内山が住み暮す井筒屋からも近く、神谷の屋敷も四谷・坂町ゆえ、これも近い。

小兵衛は川向うの鐘ケ淵だし、矢村孫次郎は、目黒の西感寺という寺に寄宿していて、二人とも武蔵屋には遠い。

そこで小兵衛は、同門の宴がすむと、身内同様の弥七の家へ、孫次郎と共に泊ることにしていた。

「妙じゃな、孫次郎にしては……」

「急病でもあってのことかのう」

「さて……？」

はじめは案じ顔だった神谷新左衛門も内山文太も語り合ううちに、そのたのしさと酒に酔い、いつしか、孫次郎のことを忘れてしまったようだ。

「では、また、来年にのう」

「それまで、この世にいるものか、どうか……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、いったのは最も年上の内山文太である。

それぞれに迎えの者が来て、神谷と内山は、弥七の女房が心づくしの大きな折詰をみやげに、上機嫌で帰って行った。

その後で、秋山小兵衛がひとり、武蔵屋へ残った。

渡り廊下から、弥七夫婦の住居のほうへ移り、茶の間で、弥七の女房から茶のもてなしを受けつつ、小兵衛が、

「弥七は、まだかえ？」

「間もなく、もどりますでございます。土地（ところ）の人たちの寄り合いがございまして」

「そうか、弥七も寄り合いかえ」

「武蔵屋の親分」とよばれて、弥七の人望は高い。それゆえ、何かにつけて相談を受けるのであろう。

茶をのみながら、小兵衛は、

（孫次郎は、どうしたことか……？）

不審のおもいが消えぬ。

孫次郎は、これまでに約束を破ったことが一度もない。欠席したことは二度ほどあるけれども、その都度、小兵衛の許へことわりをいいに来ている。また、それができぬわけはない。

となると、今日の宴には出席するつもりでいて、突然、何か急変の事あって出られなくなった……そのようにおもわれる。

矢村孫次郎は、小兵衛にとって弟弟子ゆえ、何くれとなく面倒を見てきてやったし、孫次郎もまた、かならず三月に一度は鐘ケ淵の隠宅へ、

「秋山さん。お変りもありませぬか」

手みやげを持って、あらわれる。

これほどの男が、年に一度の同門の宴を無断で欠席するはずがないのだ。

（そうじゃ。明日は目黒へ立ち寄ってみよう）

茶をのみ終えたとき、小兵衛のこころは決まった。

翌朝……。

秋山小兵衛は町駕籠をよんでもらい、武蔵屋を出て、目黒へ向った。

御用聞きの弥七も、矢村孫次郎の無断欠席を小兵衛から聞くや、

「そいつは、どうも、おかしゅうございますね」

ためらいもなく、いった。

「やはり、そうおもうか？」

「はい」

弥七は、孫次郎の人柄をよく知っている。

それだけに、御用聞きとしての勘ばたらきが、層倍にはたらいたのであろう。

「私も、お供をいたします」

弥七は、小兵衛の駕籠へ附きそった。

いつも、朝のうちに一度は武蔵屋へ顔を見せる傘屋の徳次郎は、このところ風邪をこじらせたとかで、家に引きこもったままだそうな。

この日の小兵衛は、着ながしに羽織をつけ、脇差一つを帯したのみで、竹の杖を手にしている。

矢村孫次郎が身を寄せている西感寺は、目黒村の金毘羅大権現の少し先にあった。

このあたりは竹藪が多い。

春になると、たくさんの筍を大きな籠に詰め、これを背負った孫次郎が小兵衛の隠宅へあらわれるのを常とした。

小兵衛と共に暮すようになってから、めっきりと口が悪くなったおはるが、

「目黒の竹藪に棲んでいる大狸が、筍を担いで来た」

などという。

なるほど、そういわれてみれば、孫次郎の顔が狸に、

「似ていないこともない」

のである。

剣術に鍛えられた体軀は堂々たるものだが、顔貌に愛敬があり、西感寺の和尚もいたく孫次郎が気に入り、庫裡の裏手の物置小屋を改造してくれたので、此処に孫次郎は住み暮している。

さて……。

小兵衛と弥七が西感寺へ到着してみると、顔なじみの若い寺僧が、

「あれ、昨日は矢村先生、そちらへうかがっていたのではございませぬか？」
と、いうではないか。
小兵衛と弥七は、一瞬、顔を見合わせた。
「二月十日は、毎年、武蔵屋さんへ……」
いいさす寺僧へ、
「昨日も、そのように申して出かけましたのか？」
「はい。秋山先生に、お目にかかるのがたのしみだと申されまして」
「ふうむ……」
例年、同門の宴の夜は、小兵衛と共に武蔵屋に泊る孫次郎ゆえ、
「昨夜も、武蔵屋さんへお泊りかと存じておりましたが……」
「いつごろ、出て行きましたかな？」
「さよう……今日は、少々早目にと申されまして、昼すぎに出かけられました」
となると、西感寺を出て四谷の武蔵屋へ向う途中で、
（何ぞ、異変でも起ったのか……？）
小兵衛の顔は曇った。
長年にわたり、剣客暮しをつづけてきている矢村孫次郎ゆえ、異変の可能性がさまざまに考えられる。
小兵衛と弥七は念のために、孫次郎の小屋を見せてもらったが、古びた行李と葛籠が一つず

つ、それだけの簡素な部屋には別に変ったこともない。
小兵衛が贈った机の上に、孫次郎が可愛がっているという白い猫が寝そべっているのみだ。
「矢村さんの身に、何ぞ起りましたか？」
寺僧の知らせを受けて、和尚が小屋へあらわれ、小兵衛に声をかけた。
小屋の外へ出ると、空に鶴の群れが渡っている。
今日は、汗ばむほどに暖かった。

二

間もなく、秋山小兵衛と四谷の弥七は西感寺を後にした。
四十をこえて尚、妻も子もなく、気楽気ままな独身の剣客だというので、西感寺では、さして心配もしていないらしい。
「何とおもう？」
と、小兵衛が竹藪に沿った道を歩みながら、弥七へ尋いた。
「やはり、妙でございますね」
「そうおもうか、お前も……」
「はい」
うなずいた途端に弥七が、
「そうだ……」

「どうした？」
「大先生。矢村さんは、毎年二月十日に、私のところへお見えなさるとき、かならず女房と子供へ手みやげを持って来て下さいます」
「あ……」
「ほれ、大先生も御存知の、例の饅頭を……」
「そうだったのう。いつか、お前に聞いたことがあるわえ」
その饅頭とは、麻布・本村町の遍照寺という寺の門前にある〔佐野六〕という茶店で売っているものだ。
それと知られた菓子舗で、何々と銘打って売る上品な饅頭とはちがい、佐野六の老夫婦が手づくりの、形も不揃なものだが、皮にする粉もよく、小豆の餡もよい。
矢村孫次郎は、酒も汁粉もという両刀づかいだから、饅頭には目がなく、
「佐野六饅頭」
みずから名づけて、この茶店へ、よくあらわれるらしい。
「こりゃあ、親分。なかなか結構ですよ」
と、弥七の女房も佐野六饅頭をほめて、
「こうしたものを、うちの御客さまにもお出ししたら、よろこびなさるかも知れませんねえ」
洩らしたことがあった。
「佐野六へ行ってみようじゃあございませんか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com